東日本大震災　災害派遣ボランティアの記録

社会福祉法人　碧南市社会福祉協議会

1　日程

平成２３年７月１２日（火）～７月１５日（金）

2　活動場所

宮城県石巻市

3　参加者

市民ボランティア１８名（うち、一人は２日目朝に都合により帰宅）
社会福祉協議会職員２名
（６０代：７名、５０代：３名、３０代：５名、２０代：４名、１０代：１名）

4　主催

社会福祉法人　碧南市社会福祉協議会

5　共催

碧南市

6　協力

社会福祉法人愛知県社会福祉協議会

※この事業は、愛知県社会福祉協議会の「福祉でまちづくり総合推進事業」助成を活用して開催しました。）

７　行程（当初の予定）

１日目　７月１２日（火）

２０：４５　　碧南市役所東　駐車場　集合

２１：００　　出発　※途中、サービスエリア等で適宜休憩。

２日目　７月１３日（水）

７：３０　　石巻市災害ボランティアセンター　着

８：３０　　活動開始（活動場所まで移動）

１６：００　　活動終了（石巻市ボランティアセンターに帰着）

１６：３０　　宿舎に向けて出発

１７：３０　　宿舎に到着、入浴等

１９：００　　夕食、意見交換、入浴等

２１：００　　就寝

３日目　７月１４日（木）

７：００　　宿舎出発

８：１５　　石巻市災害ボランティアセンター　着

８：３０　　活動開始（活動場所まで移動）

１６：００　　活動終了（石巻市ボランティアセンターに帰着）

１６：３０　　宿舎に向けて出発

１７：３０　　宿舎に到着、入浴等

１９：００　　夕食、意見交換、入浴等

２１：００　　就寝

４日目　７月１５日（金）

９：００　　宿舎出発

近隣被災地視察（塩釜市、七ヶ浜町　等）

１９：００　　碧南帰着

８　活動の様子

①　７月１２日（火）

初日は、２０：４５に碧南市役所に集合し、社会福祉協議会会長の激励のあと、宮城県石巻市に向けて出発しました。

出発前に、社協会長樅山よりご挨拶と激励をさせていただきました。

出発前は皆さん元気いっぱいで笑顔です。

②　７月１３日（水）

７時３０分に石巻市災害ボランティアセンターに到着する予定でしたが、途中、東北自動車道が事故により通行止めになり、いったん一般道におりたため、石巻市災害ボランティアセンターには１０：００に到着しました。その後、ボランティアの受付等をした後、活動する石巻市北上町まで向かい、１１：００から活動を開始しました。

石巻専修大学内に設置された災害ボランティアセンターです。

バスに「愛知県碧南市災害派遣」とステッカーを張り、ＰＲしました。

主に、個人宅の畑や庭などに堆積したヘドロの除去作業やガレキの片付け作業を皆で協力して行いました。

ボランティア依頼者から説明を受けます。被害の様子等もお話いただきました。

ヘドロの除去作業を行っています。においもあり、大変です。

寝不足の上、炎天下での重労働ですので、休憩をしながらの作業です。この小屋もほぼ一旦水没したそうです。

この家の１階は水没したそうです。本日の作業が終了し、ボランティアセンターに戻ります。

ボランティアセンターに戻り、本日の活動の報告をした後、宿舎へ向かいました。皆さん、炎天下での作業となれないスコップや一輪車の作業等で、とても疲れた様子でした。

石巻市内で団体での宿泊が困難であったため、日本三景で有名な松島町に宿泊しました。

松島も津波の被害が甚大で、４ヶ月経っていても、営業が再開できないホテルやみやげ物店等が多くありました。

津波で使用不能になった車が保管されている場所の横を通り宿舎に向かいました。

宿舎で今日の感想と明日へ向けての意見交換をしました。

③　７月１４日（木）

宿でゆっくり休むことができ、活動２日目は皆さん元気を取り戻しました。

石巻市災害ボランティアセンターに寄った後、活動先に向かいました。昨日の活動先で少しやり残した部分がありましたので、そこを午前中で片付けた後、その隣のお宅の庭に堆積したガレキ等の片づけを午後に行いました。

作業をした家の前には、まだ撤去されない流失車両が残っていました。

このあたり全域が北上川から溢れた津波で浸水し、甚大な被害を受けました。

あらゆるものが流されてきて、散乱しています。一つ一つ拾って片付けます。

なぜこれがここに？というものや大きなものも協力して片付けます。

ボランティア依頼者からお話を伺います。すべての農機具が流されてしまったこと等辛い現実もお話いただきました。

すべての作業が終了し、美しい風景を背に、皆で写真を撮りました。皆さん充実感からか、笑顔です。

作業終了後、ボランティアセンターに帰る前に、全校児童のおよそ７割が亡くなったり、行方不明になったりしている大川小学校へ出向き、亡くなった方のご冥福を祈りました。

重機によるガレキ撤去が進んでいました。学校すべてが津波で浸水したそうです。

子どもたちへジュースやお菓子などのお供え物が多くありました。

大川小学校すぐ西にある新北上大橋も甚大な被害をうけました。

大川小学校のすぐ近くです。漁船が流失した家の敷地に留まっています。

最後に災害ボランティアセンターで活動報告をしました。

災害ボランティアセンターで碧南市のテントも活躍していました！

④　７月１５日（金）

最終日は、碧南に帰る前に、碧南市職員が派遣されている塩釜市の被害の様子を社中で視察した後、七ヶ浜町に開設されている災害ボランティアセンターや、ＮＰＯ法人レスキューストックヤードが災害ボランティアの活動･宿泊拠点として開設している「きずな館」の見学をしました。市町村によって異なる災害ボランティアセンターの開設状況や運営方法についても学びました。

七ヶ浜町。家の土台を残して、すべてが無くなっていました。

港も岸壁が崩れるなど、甚大な被害を受けていました。

「きずな館」の説明を職員さんから聞いています。

七ヶ浜町災害ボランティアセンターの様子を見学しています。

後は、ひたすら碧南に向けて帰りました。１９時碧南着の予定が、首都高速の渋滞により、２３時になりました。

９　参加者の感想

- 暑い中、想像以上の重労働でした。４ヶ月が経った今も手付かずの場所が沢山残っており、地元の方の苦労が少しわかったと思う。人手が、機械が、まだまだ足りていないと感じた。
- 「私たちは生きているだけありがたい」という現地の方の言葉が印象に残った。「『助けて』という声が聞こえるのにどうすることもできなかった。」「母と子２人が逃げる際、母と子１人が津波に流され、残された子は母と妹が流されていくのを目の前で見て、心を病んでしまった」という数々の話を耳にし、それが物語りでも映画でもなく、事実であるということに心が痛んだ。
- ２日間通して感じたことは、テレビで見たり聞いたりするのと、実際に自分の目で見るとはぜんぜん違うと感じた。大川小学校を訪れたとき、テレビで見た津波の光景がよみがえってくるように感じた。実際にそこにすんでいて被害に遭われた方々のことを思うと気の毒に思う。あの光景を見るたびに津波のことがよみがえってきて一生消えない大きな傷が残ってしまったのだと考えると心が痛みます。大切な人を失うことに大きな被害も小さな被害もありませんが、被害の広大さを考えると、いてもたってもいられません。今後も何らかの形で、できる支援を続けていきたいと感じました。
- スコップで始め泥をかいていたのですが、途中で一輪車にのった泥を運ぶほうにまわりました。若い人のたくましさで暑さの中助かりました。若い人のスピードに始めついていってしまい、バテ気味になってしまいました。リズム良く、ゆったり動くことを覚えました。夏は水分補給と休憩を取ることが必要と感じました。
- 現地の方とお話して、津波の恐ろしさを感じ、後先考えずにまず高台に逃げるということを、依頼者に教わりました。
- ボランティアも、若者、高齢者上手に組み合わせ、ペアでの活動にて助け合うことができました。
- ずいぶん重い大きな物（便器等）までが流されてくる津波の大きな力を感じました。大勢の力で早くゴミが片付き、大きな力強さを感じました。
- 依頼者の方からキュウリ漬、冷たい飲み物を頂いて感謝の深さを知りました。塩水に農機具がつかり、だめになってしまったので、３年は米ができないとおっしゃっていました。

- ４ヶ月過ぎても警察の方が行方不明の人の捜索している姿を見ました。大川小学校周辺の集落が津波にのまれた風景をみて胸が痛くなりました。
- 東北でも夏は中部と同じく暑い。ある程度動いたらどうしても休憩が必要になる。災害から時間が経つと草が生えたりクモが巣を張ったりしてますます状況が厳しくなる。
- 現地の方と話をして、ごく普通の方でもとんでもない体験をしているのだと実感した。
- あちこち泥だらけだったので、腰を下ろす場所が欲しかった。バスの中であんまり寝れなかった割には動けてよかった。これだけ人数がいても一軒の家の泥かきも一日で終わらせられない。すべての家がまた元のようになるには相当時間がかかると思う。
- 前日の作業で利き腕が筋肉痛になっていて辛かったけど、やっているうちに感覚が麻痺してきたのか、よくわからなくなってきて、楽になった。役割分担とかはしなかったけれど、それぞれがやるべきことにちゃんと気づいて自発的にやっていたので、スムーズに、ワイワイやれた。相当暑かったけれど、湿気がそれほどでもないのと、風が吹いているので、しっかり休憩することができた。
- 屋敷周りのヘドロをスコップで掘り起こし、一輪車で前の道路の隅まで運んだ。今日の活動は午前中遅くなったためか、張り切りすぎたためか一気に疲れたような気がしました。前日のバスの中での寝不足もあったかと思うが、もうすこしピッチが遅くても良かったのかなと思いました。
- 現地の方と話をして、実際に自分たちの身に起きることとは思えないような現状に、気の重くなる思いがしました。
- 参加している若い人達の頑張りで助かった。自主的に参加している人達なので、動きも身を惜しまずというか、感謝、感謝。
- 道路、側溝まわりのヘドロ土の片付けや、家畜舎まわりのゴミの片づけをしました。参加した人達の団結力がすばらしかった。
- 活動場所の前の田んぼを見ると、震災後手付かずのままのような感じがしたが、警察官の人達が大勢並んで田んぼに入り、行方不明者の捜索をしている様子を見ると、立場、立場で頑張っておられるなと感じ、一日も早く、一人でも多くの不明者が見つかることを祈りたいと思いました。
- 困っている人を助けるということは、普段あまりできることではないと思います。このような災害はもう起こって欲しくないですが、ボランティアに行く機会があれば、参加させていただきたいと思います。

- 現地の方は、被災されて大変な思いをされている中、自分たちのようにボランティア等で訪れた人間に対して、とても良くしてくれて感動しました。
- 来て良かった。
- 震災から４ヶ月経った今でも、津波の被害に苦しめられている人がいるということがわかり、自分たちボランティアが活動することで本当に少ない力ですが、被災者の力に慣れていることがわかり、自分のする活動は正しいことだと思い、とてもやりがいを得られました。
- テレビを見ているだけでは感じられなかった被災者の方の気持ちが感じられました。
- 私は今回始めて被災地に来て、なぜもっと早い段階で来なかったのか後悔しました。４ヶ月経ち、少しではありますが確実に復興が進んでいるのを感じ、自分ももっと力になれたんじゃないかととても思いました。とても短い２日間の活動ではありましたが、人の思いやりの気持ちや仲間の大切さ、助け合いの大切さを学び、普段の生活では学ぶことのできないことが学べて、今回のボランティアに参加してとても良かったと思います。
- 社協さんには、またボランティアを企画していただきたいです。
- 田畑の泥だしをしました。炎天下でしんどかった。テレビの映像よりも災害が大きいことを伝えたい。また、現状を見たら碧南市にも高い避難場所の確認をしたほうが良い。
- 泥だしをしました。作業後の水は死ぬほどおいしい。
- 現地の方と話をしました。車などが使えないことの不便さ。地震はすごい恐怖だったと思う。でもボランティアに来た私たちに「ありがとう」とやさしい笑顔で接してくれた。人はあたたかい。どんなコトがあっても生きていれば笑顔になれる時は来るんだな。
- 作業して１時間もしないうちにボランティアをなめてたんだと思った。炎天下の作業はとっても、思っている以上に辛いです。でも、一人じゃないこと、周りの人達が頑張っている姿で自分の背中を押された気がする。みなさんこんな良い経験をさせてもらい、ありがとうございました。
- 北上町の個人宅で、畑に堆積した泥だしをしました。畑に堆積したものは、泥と北上川の川砂でした。気の遠くなるような災害でしたが、現地の方のお話は、私たちにはユーモアの混じった話でとても感心しました。
- ４ヶ月過ぎても、まだ手付かずの災害地が沢山あることを他の人に伝えたい。
- 石巻専修大学のキャンパスに、碧南市のテントが張ってあることをうれしく思いました。
- 個人宅の畑の残りの泥だしや隣宅の牛舎周りのゴミだしをしました。津波の水が１ヶ月

近く引かなかったこと、きれいな木造住宅に感じましたが、床まで水が来たことがわかりました。

- いまだに不明者の捜索が警察などで行われていました。
- 今回、碧南市のボランティア団体として参加しましたが、負担金を高くしてでも再度、企画して欲しい。
- 個人宅の家の前、横の土砂（津波によるヘドロ）の整地及び取り除きをしました。地形や方位により被害の大きさが異なっていました。現地の方は４ヶ月も経って水害（津波による）片付けにかなり疲労しているようにみられました。本格的な復興にはかなりの時間が必要であると感じました。
- 津波により流されてきた雑多のゴミ類の多さに驚きました。
- 北上川に架設されたトラス及び桁が３スパンほど流され５００m程の地点にあった。鋼製構造物でなおかつかなりな重量と思われる橋が上流にあった。津波の大きさ及びエネルギーに驚く。
- 個人宅の畑の泥だしをしました。初日のため、活動のペース配分がわからず、意気込んで作業したので体力消耗が早かった。
- 震災から４ヶ月が経ち、現地の方は明るくお話していただいた。自宅及び周辺の震災当時の状況を説明していただき、予想を超える震災の大きさを感じた。
- 石巻市街では震災の形跡がほとんど見られなかったが、海岸沿いでは震災当時のままの状況であり、復興するまで時間がかかるように感じた。
- 微力ながら成果があり、今回の活動に参加してよかったと感じた。ただ、被害場所があまりにも広いため、今後も継続したかつどうが必要と思われる。
- 現地の方に震災当日の自宅の様子を写真で見せていただき、被害の大きさに改めて驚きました。お話を聞いている最中も、近くで行方不明者の捜索をされており、まだまだ復興までの道程の長さを感じました。
- 公的な所の復興と、私的な所の復興の差を、実際に現地へ来て感じました。
- 北上川近く、山と田、畑に囲まれた地域にある個人宅の庭先にてヘドロの除去作業をしました。まず、川から流れてきたヘドロなどがどれだけの量で、被害の大きさ、地元の方々だけでは手に負えない現状であると身をもって感じた。また、ボランティアの方が自転車で走り回って現地の声を聞き、それをもとに僕たちみたいなボランティアに伝えるというマンパワーのすごさを感じた。

- テレビや新聞では感じることのできない生の声を現地の方から聞けたことは本当に貴重な経験でした。ただ、僕が思っていたほど落ち込んでいる雰囲気（実際には言葉にできないほどの経験をしたと思うが）がなく、皆さん笑顔で接してくれて逆に元気をもらった。手作りの漬物・梅酒は最高だった。
- 東日本大震災は、福島第一原発の被害、話題が大きくてそこに注目がいきがちだが、今回のような地方の農地帯も被害がとてつもなく大きい。今もなお行方のわからない人がたくさんいたり、ヘドロが残ったまま営農ができずにいる場所があることを知ってほしい。農家にとっては収入がないだけでなく、普段どおりの生活ができないという現状。本当に早く元通りの生活が送れるようになって欲しいと心から願っている。そしてまたチャンスを見つけて戻ってきたいと思う。このような貴重な機会を与えてくれ有難うございます。
- 個人宅のヘドロ出しをした。海の水により、ヘドロや雑草の種が運ばれてきて、異臭がし、雑草が生え、住民の生活が苦しくなる。
- テレビで見る事よりも、実際に聞くとは感じ方が違い、とても考えることが多かった。
- 現地の人は、疲れているのにすごく明るく接してくれます。とても強いです。
- 海の力は本当に色んな物を運んでくる。もし、津波が襲ってきて外にいたら、飲み込まれたり物が襲ってくるため、本当に怖いと感じた。
- 宿舎の風呂で、タクシーの運転手と話したが、実際に運転中に津波が襲ってきたらしく、とても怖かったそうだった。
- 津波は本当に怖い。地震は今の耐震性だとそんなに家は倒壊しないと思うが、津波は本当にどうしようもないのでは？と伝えたい。
- 初めてボランティア活動をして、やはり暑かった。碧南と変わらない暑さだった。やはりすごく規模の大きな地震だったんだなあと感じた。まだまだボランティアの人が必要だと思います。
- 現地の方に、亡くなった人の話とか、すごく生々しい話を聞きました。すごく悲しく思いました。
- ボランティアはまだまだ足りません。来られる人は是非来ていただきたいです。
- おじいさんとおばあさんに話を聞きました。「津波が家の床の上２０cm ぐらいに来た。それで水の強さがすざまじいんだ」と聞きました。
- 思った以上につらくて、諦めそうになったが、復興という目標に向かって、人はこんな

に助け合えるんだと思い、チームワーク（仲間）が大事と改めて思いました。

- 現地の方と話をして、つらい話ばかりで、心も被災したんだなと感じました。
- 自分が思っている以上の備えが必要なこと、避難経路の定期的な確認を家族とすることが大事だと、他の人に伝えたいと思いました。
- 畑の泥だしをしました。塩分を多く含んだヘドロの臭さ、津波で運ばれた砂は、ぶつかった壁よりも少し離れたところに堆積する等、新しい発見がありました。
- 現地の方とお話をして、明るく元気なお姿に安心し、また激励された思いです。
- 塩水をかぶった畑に、キュウリ、トマト、ナス、ひまわりなどを植え、「ナスとトマトは良いが、キュウリはだめ」と話された姿に、前向きに生きていこうという、強い意志を感じ、学ばされました。
- テレビ、新聞などで色々知ってはいても、泥だしを通して、塩分を含んだ泥のにおい、津波で運ばれた砂が固い層になってしまったことなどは、現地でしか理解できないこと。参加してよかったと思いました。
- 牛舎の片づけをしました。１頭の牛は、御子息が津波の来る前に放たれたそうです。牛は泳いで難を逃れ、鳴き声で飼い主が見つけて戻ってきたのです。被災後、水不足からついに手放すことに。飼い主と牛のつながり、そしてついに手放さなければならなくなった被害の深刻さを知らされました。
- 庭に入ってきた津波がもたらしたヘドロ。それが山のように積まれていました。ご家族で災害を乗り越えようとする姿にたくましさを感じた次第です。
- ヘドロの中からは、赤ちゃんの歩行器、開封されていないコーラの缶、包装紙がついた石鹸、靴、辞書、食用油などなど、日常生活がそのまま泥にまみれて出てきたような思いです。津波の襲来がいかに急であったか、日常生活の突然の分断であったことを知らされました。
- 力のいる手作業で、道具がそろって活動しやすかった。炎天下、リーダーが休憩を定期的に取るよう指導があったので、疲れをあまり感じなかった。
- 集落がほとんど流されたと聞き、その場所に２軒の家の形だけが残っているのを見て、津波の恐ろしさを感じた。住んでいる方は、見慣れた風景が変わってしまったこと、また、友人や親類の方が亡くなってしまったことは、言葉が見つかりませんでした。
- ４ヶ月過ぎても進まない復興。長期間になると思います。近所の連携の大切さや地域の防災意識を高めることが必要と感じました。

１０　まとめ

この度の「東日本大震災　災害派遣ボランティア」は、多くの市民の方の「被害を受けた方の支援をしたい。」「ボランティアとして被災地で活動したい」といった個人のボランティア意識の高まりに応えると共に、大震災を肌で感じ今後地元での取り組みに生かしていけるよう実施したものです。

碧南市社会福祉協議会としても、被災地への社協ネットワークによる活動支援として実施しました。

普段から、碧南市社会福祉協議会にご協力頂いている、「碧南防災ボランティア連絡会」のメンバーの方を始め、多くの方から定員を超えるお申込みを頂きました。

参加したメンバーは、６０代：７名、５０代：３名、３０代：５名、２０代：４名、１０代：１名で、初対面のメンバーでしたが、事前説明会で宿舎の部屋ごとにグループをつくり、お互いの交流を図っていただいてから当日を迎えました。そのおかげか、当日の作業は非常にチームワーク良く、お互いに助け合って活動ができたと思っております。

炎天下での泥だし等の作業は非常に過酷で､随時休憩をとりながらの作業となりました。熱中症になる方もなく、皆さんが無事に碧南に帰ってくることができて本当に良かったと思います。

実際に被害に遭われた方から直接お話を聞くということ、現地で小さな力かもしれないけれどもボランティア活動をするということは、テレビや新聞報道からは得られない、貴重な体験をしていただけたのではないかと思っています。また、ボランティア活動だけでなく、実際の災害ボランティアセンターを見学していただいたこと、ボランティアコーディネーターの方からボランティアセンターの運営方法についてご説明いただいたこと、石巻市・塩釜市・七ヶ浜町と津波被害の大きかった街を視察していただいたことは、より多くの方に今回の震災の理解を深めていただくことができただけでなく、今後の碧南市の防災対策や、碧南市で大規模な災害が起こった際に、ボランティア・ボランティアコーディネーターとして活動していただくきっかけ作りができたと思っております。

地震の揺れや津波は収まりましたが、被害に遭われた方の生活再建や心のケアは、まだまだこれからです。今後とも碧南市社会福祉協議会の活動にご協力いただくとともに、東日本大震災の復興支援にご協力いただきますよう、お願いいたします。